

鯨 研 通 信

第 349 号

1983年 4 月

財団法人 日本捕鯨協会 鯨類研究所 〒136 東京都江東区大島3丁目32番11号(大島町ビル)電話 東京 (683) 3621-2



北海道捕鯨史話

矢 代 嘉 春

加賀のサムライ捕鯨

加賀百万石は不思議な国である。日本の捕鯨史から見れば忘れられたような存在だが、その藩中から日本の近代捕鯨をつくりあげた人物を五人も出している。今日の日本水産という世界有数の水産企業のルーツをなした東洋捕鯨の創立者の一人で明治鯨界の名物男横山一平、陸軍将官の塩谷方園、河波有道、それにこれから書こうとする俊才関沢明清と北海道捕鯨のルーツをなした斎藤知一である。それに北海道庁に在官して斎藤をバックした興津寅亮も加賀藩士であった。

関 沢 明 清

関沢は前田家の数ある俊才の中から選ばれて、幕府の目をのがれ、慶応元年薩摩藩の士弟達とロンドンに密航留学をした。帰ってからも藩主前田公のお供にえらばれ、欧州に遊んでいる。上級士族の二世ならばともかく、あの身分制度のきびしかった中で、250石の低い身分でこれだけ重視されたのだから余程の人材だったのであろう。天保14年(1843)生れである。

彼の経歴は醍醐組捕鯨史関係記事にくわしいからそれにゆずるとして、今でいえば水産庁初代長官に任せられ、黎明期の日本漁業に欧米の知識を導入し、あの時代に既に米式帆船捕鯨や、鮭鮓やカキ養殖、製網等を積極的に開発した。そのため水産博始め各種博覧会の中心人物として、ウイン万博、米國水産博にまで手を広げ、博覧会男と異名をとる程の執心ぶりであった。

斎 藤 知 一

一方の斎藤知一は、関沢とは正に対象的な天衣無縫

の大野人であった。関沢とは18歳も年下で(文久元年生・1861)関沢が欧州から帰った明治元年は7歳の頑童であった。

然し加賀藩の士族で結成した益進社では、若輩ながらリーダーとなった。士族授産のため、前田家の援助を受けて組織した起業社で、北海道で農・漁業を営むこととなったのは明治16年であるから、活躍時代は関沢と同時代であった。

北海道では泣く子もだまるといわれた大アバレ者で、開拓時代の荒っぽい争いが頻発するが、彼が叫んでゆくと顔を見せただけで治まってしまったそうで、北海道一の俠客といわれたと今に伝える。

捕鯨がいろいろ始まりロシア人砲手を雇い入れた方がいいが、いいように馬鹿にされ手がつけられぬ処へ出かけて一喝すると、隅の方へ逃げてしまったという逸話は、今に健在な彼の輩下のなつかしんで語るところである。

醍醐組との出会い

北海道の商業捕鯨は、安政5年房州勝山藩の醍醐組から発する。この詳細は房総の捕鯨やジョン万次郎(上編)にくわしいが、醍醐組は56隻の捕鯨船と600人からの捕鯨漁師を擁し、その水軍的潜在勢力は海軍勢力の無い徳川幕府にとっては垂涎的であり、既に五代定昌が蝦夷防備の役割を求められていて『享和2年2月蝦夷地鯨漁請負の所3月6日鯨漁御見合せ相成(要用記)』とある位であった。幕末に入るやロシアの南下圧力は愈々加わり、八代新兵衛定綱は箱館奉行堀部織正の信頼と強力な要請により出動を決意、安政5年箱館に渡り廻浦奉行の村垣淡路守に随行、日本で第1番目の捕鯨船箱館丸にのり、択捉・国後を廻りオ

ホツクを西行して宗谷から対岸の樺太に渡り数番あたりまで北上し、それから引き返し北海道西岸を南下し箱館に帰った。

この視察の結果、噴火湾が捕鯨に適することを見極め、アリューシャンにも近くロシアと対抗上有利な事も判明、ここに屯田兵的漁業団として拓殖し主に鯨を捕ることにした。

旭が南下勢力は愈々露骨となり、今度は樺太に鉾先をかえ、雑居地をいいことにして侵出を始めた。あわてた幕府は今迄の栖原・伊達等の大漁業家でも、国防ということには話にならず、平素のアイヌの薄遇等もあって、醍醐組をさしむけることとした。

然し肝心の鯨は捕れなかったが、鯨鯨はどうやら黒字程度の成績をおさめたようなものの、維新の大動乱に突入されてしまってはどうにもならず、混乱の中を引き揚げざるを得なかった。

こうして文化以来囑望されていた醍醐組の北海道進出は打ち切りとなり、以後はアイヌが細々と流れ鯨をとり、ブランクの中を十余年を経て明治20年となった。

明治の醍醐組

房総に引き揚げた醍醐組は2万5千両の大きな痛手を受け明治2年廃業、あとは細々と地元漁業や鯨油製造、旧船員達の鮪漁など、そして時折鯨鯨の試漁などでブランクの20年を過ごし、関沢明清がその後継者として房総に腰を据え、鯨鯨漁を主体とし米式帆船捕鯨による北太平洋の抹香、アリューシャンのオットセイや海獣をねらって、多年の宿願を達すべく先ず鯨鯨に成功をおさめ、ついで新造の鮪船で大島へ出漁大漁をし、帰航の途突然急逝するという非運に遭遇してしまった。

国家のためにも房総のためにも惜しみても余ある人材であるが、この間に同じ加賀藩の斎藤知一は、持ち前の突進性と雄大なる壮途のもとに、加賀の金石捕鯨の特殊鯨法を用いて、北海道の捕鯨に飛躍することとなった。明治18年のことである。

(註) 本論考の場合加賀捕鯨地は金石・内灘・日末地方をさし、富山湾側はささない。以下金石を代表名にする。

かくして北海道捕鯨は先ず房総の醍醐組が先鞭をつけ、これを受けて斎藤知一が故郷金石の技術を持って北海道に定着し、ついで明治25年に入り関沢が北海道捕鯨へと再挑戦することとなり、東西から加賀藩のサムライ達にかこまれることとなった。流石に日本一の

雄藩である。

旭で本書(別に出版予定の日本捕鯨文化史)は日本の捕鯨史の欠落や誤りの洗い直しを目的とするので、その下限は近代捕鯨史との接点のノルウェー式捕鯨法導入期、つまり明治20年前後を区切っている。

従って関沢も斎藤も丁度その接点にあるために、その結び目の事象を捉らえて書いておいたが、彼等が中心になって活躍した近代捕鯨へ踏込む事をしない。これらは近代捕鯨史にまかざるべきジャンルである。

但し斎藤をめぐる事蹟については、幸いに斎藤を大叔父に持つ中村春江女史が、目下懸命に加賀捕鯨史に取組んでいるので、是非それによられんことをおすすぬめしたい。

斎藤の北海道捕鯨史

前章の意を受けて彼が北海道捕鯨史にのこした業跡を、尤も権威ある北海道漁業誌の捕鯨部分(次頁)を省略なしで原文転記し、それを下限として明治前期から幕末へと遡及しそこで伝統漁法と接続しようと思う。

不可思議千番な成績

北海道捕鯨はアイヌにより僅かな数が毒矢によって捕獲されたり、流れ鯨を捨ったりで移業にも産業にもなっていない。そこへもって行って、これという伝統技術を持たない加賀サムライ達が拓漁に出かける。陸上産業ならともかく、海の上の仕事である以上いくら百万石であろうとどうしようもない筈だ。ましてやいまだノルウェー砲は導入されておらず、米式捕鯨さえ開発されていない。当然ひどい背負いなげを喰い暴発してしまうことはジョン万次郎どころでない筈だ。

旭がおどろくことに斎藤が大日本帝國水産会社の傘下に入り、捕鯨専門に挺身するようになったとたん、即ち明治23年には、北海道漁業誌によれば何と30頭、他の記録で22年度23頭、23年度には36頭という驚くべき成績をあげている。渡島が明治19年であるから実質的には丸2年、土地にも漁撈にも全く素人な筈なのに一体これはどうしたというのだ。

然もそれが2隻の網船に高さ15尋、幅13尋という小型の網をのせ、他に勢子船2隻、これが2組だけである。土佐の浮津組に見れば明治10年から14年迄、5年間で127頭。その仕掛けたりや勢子船16隻、網船12隻、持双船2隻で計30隻、網は18尋四方を160枚である。この大装置で年平均25頭そこそこしか捕っていない。4倍もの規模である。一体どんな鯨を斎藤は捕

浴 革

享保七壬寅年十二月

黒印
町奉行所
取江

誰

其後安政以後幕府の所轄となり、捕鯨の利益を認め鯨獲専業を起すの計畫ありしと見へ、慶應二年二月七日、函館奉行所屬達に曰く「蝦夷地近海鯨取閉付函館入港の外國鯨船（望の者は傳習として乗組を差許可申に付可願出云々）」とあり。明治維新後始て山口藩人岡吉篤信氏等本業を企圖し、同藩支配天鹽岡塔毛郡沿海に於て此業を起し三ヶ年にして止む。明治五年十二月一日、開拓使函館支廳第百五十四號を以て示達する所あり、曰く「村々に於て寄鯨非外有之候節は其筋へ届出見分可請答の處近頃禦りに相成私に配分致候者も間々有之趣石は以の外心得違の事に候向後は寄鯨又は流鯨其外都て見掛次第函館近村の分は農政掛へ届出其餘村々の分は最寄館合へ念度届出見分を請ふへし。同十七年、石川縣士族齋藤知一氏來て膽振園益隣、有珠兩郡に、同十八年に後志園岩内郡に試獲せしが、地方漁業者は彼の鯨船の魚族に有害なるを知らず、鯨を海上に望めば之を求めて鯨比須とするの習慣あり、此等頑迷妄信なる漁業者の妨碍を禦り遂に志を達するを得ず。同二十年、天鹽園古前郡羽幌に於て試獲せしが漸く其業志を其撤するに至れり。抑海園に在ては漁獵の利より大なるはなく、漁獵の利は捕鯨に如かずと。我北海道は海園なり、北海の鯨船に富めるや季節に臨み沿海を航行すれば二百餘頭の群鯨を見るあり、以て北海の鯨船に富めるを證するに足る。加之鯨の魚族に害あるや鯨産卵の季に至らば數百の群鯨來て鯨鱒を吞食す。現に二十年中古前郡に於て齋藤氏が捕獲の鯨を解剖せしに、平均一頭に付凡四石内外の鯨鱒を吞食しあるを發見せりと。今之を一晝夜一回消化するものと假定せば、其漁季中群鯨が食餌となる鯨若干なるや圍り知るべからず。嘗既に如斯なるも漁民は迷夢未だ覺めず、會々齋藤氏が岩内に於て鯨一頭を捕獲し繩を繋ぎ岸に見き來るに際し、漁業者は神を捕へ鯨比須を捕ふるものとして一致團結し、遂に綱を切斷して之を放棄せりと。二十一年に至り大日本帝國水産會社に於ては根室、千島沿海に、二十三年に至り石狩園沿海に於て捕鯨の許可を得、又天鹽方面に於ては齋藤氏が執行せる捕鯨業は爾後同社に於て擔理し其業を企圖せんとす。本業の本道に隆盛なる蓋し近きにあらん。

河 波 有 道

石川県金沢区下本多町 5

四等賞 捕鯨器

懇ニ居民ヲ勸誘シテ捕鯨ノ方法ヲ授ケ爾來漸ク各村ニ伝播シ一産業ヲ開シム、其功己ニ多シ、加テ平素思フ器械ニ凝シ尙漁業ノ進歩ヲ圖ル、其勞又尠カラス頗ル嘉賞スヘシ

審 査 標 語

○石川県河波有道ノ捕鯨器雛形ハ同氏カ考案ヲ以テ造レルモノニシテ網ト魚留ノ模造アリ魚留ハ鉄糸ヲ以テ方7尺ノ門ヲ作り門下ニ利刀3本ヲ植エ來鯨ヲシテ自

っていたのだらう。

その上面喰うのは水産博覧会に出品した仕掛けは念のため次に再録するが、誠に怪しげな鯨追込切腹誘導柵とか、砂苞ブラ下げ法とかいう奇法であって現実で使用した小型網捕法ではない。この3者は一体どう結びつくのであろうか。

但し砂苞をブラ下げの金時鉞は現在でもエスキモーが使用しており、当館でも所蔵しているが廻転鉞とかツバクロ鉞などといわれていてアメリカ製である。多分米捕鯨ボートに撃たれ、鉞ツナ切つてのがれた抹香鯨が斃死してそれから取出したものであろう。

ラ肚腹ヲ割カシムル装置ナリ且其之ヲ覚知セサランシムル為メ蔽フニ網ヲ以テスルコト猶漲網ヲ張布シタル間ニ〔モジ〕筥ヲ挿入シタルカ如キ装置ニシテ果シテ實際ニ適スヘキヤ否ヤ予メ知ルヘカラスト雖想フニ未タ充全ナルモノニアラス抑々能登越中兩國ニ於テハ古來捕鯨ノ業ナキニアラサルモ鯨鯨ハ自ラ來リ誤テ台網中ニ入ルヲ捕フルノミ而ルニ能登江沼二郡ノ海岸ハ鯨鯨ノ來游スルコト夥多ナルモ之ヲ獲ルノ利アルヲ思ハサリシカハ隨テ之ヲ捕獲ノ方法ヲ講スルモノナカリシ故ニ河波氏之ヲ慨キ百方苦辛其方法ヲ考案シテ之ヲ漁夫ニ諭ス其勞空シカラス遂ニ該地捕鯨ノ業起ルニ至ル本会之ヲ嘉賞シテ四等賞ヲ与フ其報告ニ曰ク懇ニ居民ヲ勸誘シテ捕鯨ノ方法ヲ授ケ爾來漸ク各村ニ傳播シ新ニ一産業ヲ開カシムル其功已ニ多シ加フルニ平素思フ器械ノ改良ニ凝シ尙該業ノ進歩ヲ図ル其勞亦尠カラスト既ニ第二勸業博覽會ニ於テ褒賞ヲ得爾來益々精ヲ勵シテ已マサルニヨリ今回又此賞ヲ得タルナリ却說本州從來捕獲ノ方ヲ述ヘンニ漁船5艘、漁丁20名ヲ要ス其法鯨鯨ノ波間ニ見ルヤ直ニ漁船2艘ニ網ヲ分載シ鯨鯨ニ近ツケハ該網ヲ繼合セ左右ニ別レテ之ヲ囲ムナリ是ニ於テ他ノ3艘ノ漁丁ハ各鉞ヲ持テ鯨ノ網ヲ被フルヲ待テテ刺殺スルモノトス左レハ之ヲ土、肥、紀3州ノ捕鯨法ニ比スレハ装置甚タ小費用亦尠シト雖若シ出品者カ考案ノ如ク果シテ魚留ノ装置ヲシテ實際ニ適當ナラシムハ其裨益タル今日ノ比ニアラス抑々我邦捕鯨ノ業ハ欧、米ノ如ク遠洋ニ於テセス皆沿海ニ來ルモノヲ捕フルヲ以テ慣習トナスカ故ニ漁場ノ地理ヲ扱フコト甚タ緊要ニシテ殊ニ河波氏考案ル所ノ装置ノ如キハ其地理ニ關係アル頗ル切ナリ而シテソノ装置中網ヲ張り中間ニ魚留ヲ設置スルハ良考案ナレトモ魚留中僅ニ3本ノ利刀ヲ置キ鯨ヲシテ自ラ腹ヲ割カシムルハ果シテ能ク鯨ノ勢力ヲ衰弱セシムルニ足ルヤ否ヤ且鯨ヲシテ魚留ノ中ニ入ラシムルハ後方ヨリ是ヲ驅逐スルハ論ヲ俟タサレトモ尙其利刀ヲ見テ取テ他ニ避ケサランシムルヲ得ルヤ否ヤ等ニ至テハ實際經驗ノ俊ニアラサレハ予メ其効ノ有無ヲ知ルヘカラス

流石の審査官たちも判断しかねていることがよくわかる。

加賀国捕鯨法

日本捕鯨叢考(1888, 大日本水産會)には加賀国捕鯨法として次の記載がある。

加賀国石川郡金石に行はるる捕鯨法を云んに漁船3艘各7人乗とし鯨を海上に望むや直に船を出し金時鉞を投射し綱50尋を鉞身と船とに繋ぎ船は鯨の進退に従

ふ是を魁船と云ふ若し鯨の猛勢当り難きときは船中に備ふる沙苞(1苞20貫目)を40尋の葉繩に緊結し之を海に投沈して鉞に換ふ蓋し之を施すの機は突に一呼吸の間にあり若し其機を誤れば覆船の患害あり故に熟練の漁人にあらざれば其機に投する能はず如此沙苞を投するときは自ら船重く鯨の疾走を妨くるを以て鯨体疲労し其稍勢力の衰ふるに及んで他船來集し魁船の如く金時鉞を投し尙ほ刺鉞を投す其多きもの40本に及ぶ而して曳鉞(金時鉞の大なるもの)2挺を潮吹孔の上部に刺し綱を2艘の船に繋ぎ頭部に鉤を掛け1船の船に結び共に之を曳テ渚に至り咽喉を刺して全く死するに至らしむ此地從來鯨の來ることあるも土人之を稱して沖の殿様と云ひ其群集するときは恐怖し甚しきは合掌して其害を免れんことを祈るものありしも明治2年に至り始めて以上の捕法開けたりと云ふ(水産博覽會審査報告)

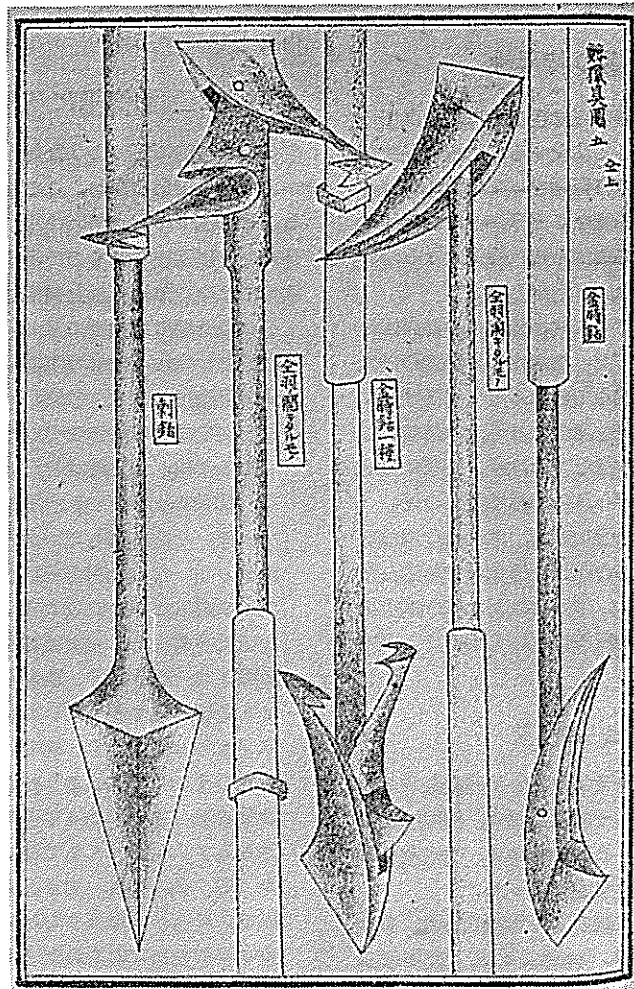
因に云ふ「鯨を捕るに余り沖に出たるときは縦ひ捕らるへきものも時によりては此方より鉞の綱を切て捨てることあり其切場所を見るに巧不巧者あり」と又「鯨を獲るに暮にかかれは其日は屠らず夜は太鼓を打て窃盜を警め夜の明るるを俟つ」と鯨史稿に見へたり

鯨種漁具船具類推

オーソドックスな捕鯨があるじゃなくほんの断片的に野心家が出かけてはすぐ引き返すという北海道捕鯨に関する資料は丸つきし無いといつていい。そこで鯨はどんな種類かを先ず知らねばならぬ。

然し類推は割合に簡単である。伊勢湾よりの熊野灘に多くある克鯨捕りの小型漁法を思い出すべきである。その証明を北海道漁業史の克鯨漁法に指摘してみよう。

『網鉞を用い網1束は径6分の麻繩にて網目4尺とし長さ15尋、幅13尋又は径2分の麻繩に網目7寸、長さ幅とも広目網と同じ』とあり九州や熊野方面より小型であり先進地が正方形なのに長方形である。数はたった2隻の網船だからほんの僅かだろう。それに反し^{ころし}殺鉞300挺、鉞錨20挺、鉞綱50戻と相当多く、殊に^{ころし}殺鉞300挺には驚く。これはあとでふれるが、小型で数が多く^{ころし}殺鯨といわれる程接岸性の高い克鯨用以外には考えられない。殊に『鯨は水中に游泳するや鱗の活発にて進退きわめて迅速なるが故に船は通常の漁船と異にして進退軽捷にして馳走なるを主とし長さ5間乃至7間にして1隻には櫓8挺を用ゆ』とある。ノロマな座頭や長須とは全く反対な俊敏さを想わせ川崎船を



用ゆとある処はあの大きく悠々とした長須は考えられない。やはりアバレ者で手をやかせる克鯨が主役であらう。捕鯨集考によると

小鯨（克鯨）は海岸の暗礁を慕い来りて潮をあぐ。その性体の小なるに比べて極めて猛烈にして之を網するや時に脱網して破る事多し、故に古来多く鉾撃して之を獲る。これ鉾剣を用ゆへきものなり

この記事は太地から伊勢に至る多くの小漁港の突捕法の記録と言うべく他海区ではこうした漁法を特に指摘される事がない。背美や座頭など大型鯨の対象はこれに数倍する大規模な装置ばかりだからである。又網丈が低いのは網が底につく程浅いということの意味しよう。つい見過してしまふ肝要なポイントである。

捕鯨方法と漁場

そこで面白いのは捕鯨方法で太地組で延宝5年に開発した網取法を小型にした克鯨用を思わせ、然も全く意表外なことは、金時鉾なる特殊な大型鉾を潮吹穴の下に打ち込み、持双代りに解剖場に曳き込むことだ。

“捕鯨の方法は種々ありと雖も当道捕鯨の方法は特異なり。鯨を海上に望むや直に船を出し、最初細き方の網を建て鯨を内に追入れ、一度該網を破らせ再び太き方の網を以て之を囲み鉾を撃ち、鉾身と船と繋ぎ船は鯨の進退に従ひ刺鉾を投じ、鯨体疲労し其勢力の衰ふるに及んで金時鉾を潮吹穴の下部に刺し、其網を船に繋ぎ之を曳て屠場に至る”。

これが長須や座頭の様な大型鯨ではとても金時鉾な

ぞで持双船の代行はできない。

北海道漁場の特異性

“他方の捕獲方は鯨の未だ死せざる内に之を曳て屠場に至らざれば、或は死して沈没するの虞あるが故なり。然れども当道の捕獲方打留銚を以て留置くが故万一沈没するも之を引揚るに憂なしと云ふ。沿海捕鯨は漁場を撰ぶと雖も、当道の捕鯨方法は海底大なる岩石なくして深さ15尋迄の所なれば適当と為す”。

私はこの記事を発見し初めて北海道漁場の特異性と斎藤の成功の原因がわかった。漁場は15尋程度の広大な砂底であるから死んで沈んでも引揚げるに憂なしというのだ。成程銚を鼻先に打ち込み銚綱をのばして留銚として海中に放置しておけば、野原に鼻をつながれた牛のように逃げられる心配はないのだ。

然しそれにしても不可思議である。北海道の浅海をみすかして斎藤が加賀捕鯨の珍奇な方法を持ち込んだということはあり得ないし、然しそれがなければ小型といえども洋上捕獲の克鯨を30頭以上も捕ることはできぬ相談である。

産額と経営

私はこの記事の虫メガネで見ねばわからぬような囲みの『沿岸には兎鯨多くして座頭、背美、鰯鯨は兎鯨に比すれば50分の1なり』の記事を発見、我が意を得たりと心に叫んだ。やはり克鯨であった。

産額、明治3年より5年迄の3ヶ年間に18頭、明治17、8、9の3ヶ年に4頭、20年に4頭、21年に5頭、22年30頭を捕獲せりとあるが、これが斎藤が主に獲ったものであろう。座頭1頭(10尋位)に白肉(皮)1,500貫、兎鯨に1,000貫位、赤肉は座頭1,000貫、兎鯨700貫内外、尙中村女史の鯨の調査によると次のようである。

明治17年1頭(長須らしい)、18年1頭(克)、19年1頭(サカマタ)、20年4頭(座頭、克)、21年6頭(同上)、22年22頭(同上)、23年36頭サカマタ4頭、24年24頭、イルカ8頭、25年23頭、26年18頭、27年15頭。

斎藤の友人渡辺渡の記憶によるものを書きとめたところある。但し他の資料と違いがあることをお断りすると中村女史は附記している。

漁夫羽刺及経費

陸上係として50人(地上出身者)、漁獲班は網船1隻につき12人、銚打船7人として100人合計150人、

船数は7、8隻らしい。資本金は一漁場当り15,000円、内訳は機械費7,000円、人件費、米塩、消費費。

北海道に伝承する

では具体的にどのような鯨組が加賀の海から北海道へ渡ったのであろうか。ここに非常に貴重な記録がある。それは中村女史が56年夏、斎藤の本拠地羽幌町を訪れた時に調査したものである。これは驚くことに水産博では全く無視された網捕法なのだ。

それは斎藤の香典帳に名の記されている嶋元四郎右衛門の孫正武氏が健在で羽幌におられ、その聞き書きを「鯨研通信342号」(1981年11月)に載せられた。それをそのまま転記させていただく。

僕は72歳、処で僕は7、8歳の頃からひいばあさん(四郎夫人)や、まごばあさん(四郎右衛門夫人)から聞いた話を覚えています。僕の家は今から4代前ひいじいさんの四郎が安政年間から金石(内灘・日末の隣村だがこの辺の中心であり、河波も木嬰もここで活躍した、加賀捕鯨地の代表名とする、能登漁場とは一線を画す、銭屋五兵衛の根拠地でもあった)の海で鯨を獲っていたのです。ところが明治に入り鯨が少なくなり、20年近くになると捕れなくなってしまい、どうしようかと思っていたときに土族の斎藤知一さんがやってきて北海道の羽幌で鯨を捕るからといって、うちで使っていた船頭や若い衆や、舟、網、道具一切まとめて斎藤さんが引き受けたの。それから鯨捕りを始めたの、それが羽幌の本当のきり始めになるのだけど、そのときはまだアイヌがいたの原住民だね。……

捕鯨法

鯨を捕る方法かね、それはね鯨の親子が泳いでいるでしょう。そこで先ず子鯨を攻めるわけさ、子鯨を捕ると親鯨は傍から離れない、それを利用して今度は親鯨を捕る。鯨は愛情が深いから捕ると泣く。その声を聞くとかわいそうでもう嫌だと思おうだがそう言っではいられない。

先ず網を張る。そして鯨の頭に網がひっかかると逃げるでしょう、そうすると網が処々で切れるようになって鯨は網をかぶったままで逃げる。そこで舟は鯨のりつけ銚を打つ。すかさず舟に積んである土俵を海中に投げ入れる。土俵の中にはバラスが詰めてあって、これを網で舟べりからつるすようにする。それをバランスをはかりながら手際よく10俵15俵と海中にさげると舟に重みが増ってくる。逃げまわる鯨の体に刺った銚はひっぱると羽根が拡

がって体に喰い込み抜けなくなっている。錨の尻には綱がついているから錨は舟をひっぱって沙を掻いても、もぐっても苦しくなるばかりで浮き上って息をする。そこを 2 の錨、3 の錨というように錨を打つのだ。錨はなおも沙を掻く、体が思うように動かないからだんだん弱ってしまう。そのとき舟はどこまでもひっぱられて下手すると天売・焼尻まで持ってゆかれる。なにせ遠くへ行かないところで錨を引いてこないととんでもないことになる。錨を曳いてくるときかね、これは綱をまいたままのを曳いてくるのではなからうか、覚えていないなあ。舟かね、錨を綱でまくから大きな舟でないかなあ、しっかり聞いていないので。……

註 舟は羽幌町史に 8 隻の川崎舟が使われ内 2 隻が綱舟で 2 隻は錨舟とある。

これを裏づける資料に羽幌町史がある。

明治 19 年 (1886) 青森県人立崎熊次郎をはじめ川口政吉、柴田善兵衛らが錨漁をはじめ、更に翌年 5 月には石川県人の斎藤知一、中西文三郎、黒田某たちが漁舟 4 隻漁夫 24 人をつかって捕錨業を始めた。

とある、この漁民達が錨で大漁をし故郷の漁師をどんどん呼び寄せ、石川県人を加賀衆と呼ぶようになった。これが縁となり現在羽幌と内灘は姉妹町となっている。

加賀の長汀に立つ

加賀藩の捕錨の管が北海道での取付ばかりになってしまった。加賀に戻らなければならぬ。では一体どのような伝統漁法が残されているのか。然し水産博審査表彰状では莫然としており、審査標語には何度も書いたように柵追込み切腹法と砂苞付錨錨法であって、これで獲ったというはっきりした記事がなく、稟考によればむしろその仕掛けだけに賞を与えたようであって仕様効果は未知数というニエアンスである。然し公式報告である以上どこかで結びつかなくてはならぬ筈で、この他にも錨かドジョウのように巨大な竹の筥をつくり 2 頭を捕ったのが経費がかかりすぎ廃したと古老が伝える。

私はこの項を書くべく何度目かの金石浜探訪に出かけた。一度など小松の飛行場で大暴雨となり雨傘を吹きとばされズブぬれになって日末の海岸に立ち、つき添いの老妻に何の因縁でこんな海にこなければならぬのか愚痴られたこともある。

然し今度の海も広々とした北国特有の鈍重な空の下

に何一つ語ってくれない、九十九里のようなこの長汀の海底で錨は金時錨を留錨として牛のようにつながれ、或は刀 3 本を植えた柵へ追い込まれたり、ウナギのように巨大な竹の筥へ押し込められたのかと腕を組まざるを得ない。

そのときふと向うの松林の中から数人の村人が出てきた。秋に生える茸狩りなそうだが、私はハタと手を打った。九十九里浜でも長汀に続く松林で初茸がよくとれるではないか。とすると此の沖は全く同じ長汀と地曳場から九十九里同様浅海に違いない。処々に磯があるからよく漁れる鰯を飽食しながら錨はカキ落しに周年廻遊するだろう。その錨道に、刀付誘導柵を設置したり、砂袋付金時錨を打ち込んでとすることなど十分に考えられるではないか。とすると 15 尋の北海道の海に転用するのは当然であろう。

本来海深というものは背後の山の高さに比例するもので駿河湾は富士山がスッポリ沈んでしまう程だし、伊豆半島をこえた相模湾は小田原あたり迄は箱根連山のみみ込んでしまう深さであるから錨の定置網の好漁場となっている。

然しそれから東の鎌倉よりの海はぐっと浅くキスの遊投場として有名。九十九里浜は千葉県に 300 米以上の山がないだけに 3 時間走っても 20 尋の浅海で北海道漁場の如くである。そう気がついて改めて金石浜に立ってみるに成程以上幾つかの奇法は決して漫画ではない、先人の貴重な体験から察出された当然の漁法なのである。偶然の思いつきで砂袋付金時錨など造る筈がない。斎藤なればこそ初めて準備したのであって、他府県の専門家では想像もできぬ工夫である。

彼はいくら錨が大漁でも脇目もふらず錨に突進したという。文字通り錨と共に生きたサムライである。加賀の浅海と同じ海況の北海道漁場、網捕漁法の経験者嶋元組の存在、それを助ける砂苞付錨の使用、熊野の錨網捕技術を知る河波有道の知遇等、幾つもの偶然が重なり合っただけの千載一遇の成功であった。

然しこの幸運は彼のようなひたむきな熱烈漢にのみ与えられる偶然であり、いわば必然の偶然である。私は斎藤知一のきかん気の想像を想像する度にアメリカ大陸を発見したコロンブスと思うのである。

追記

読者は加賀の漁法について水産博の刺刀植込柵だの、砂苞付錨錨などという珍法だけを書いていて、突然北海道の嶋元老によりオーソドックスな網捕法を持ち出され驚いたことであろう。

実は私も館報にも他誌にも何度も書いたように、このオーソドックスな網捕法の存在を知らず奇法のみを書きあげたのである。尨が終稿間に中村女史から網捕法のあるのを教わりビックリしたのであった。そこ

で文章構成に異和感があるだろうけれど、長い入院生活のためと締切りの迫った今となってはどうにもならず、承知の上で差し込んだ次第である。ご判読願えれば幸甚です。

新 刊 紹 介

吉 原 友 吉

捕鯨の歴史については他の魚介類に比べ資料が多く各地の郷土史家などによる調査研究も少なくないが、一般刊行物として出版されないため目にふれないこともある。本稿は主としてこの種の文献について紹介し、鯨のほかラッコ、オットセイも含めた。

- (1) 金 成 英 雄 房総の捕鯨 1982 34p. 18×25cm 非売品
- (2) 東 典 一 捕鯨史考 三重県化牟婁郡海山町白浦（自家出版、実費頒布）昭和57年 140p. 1,200円
15×21cm
- (3) 平戸市教育委員会 西海鯨鯢記（平戸市の文化財 No. 13）平戸市岩の上町1508, 同会刊行 昭和55年 37p.
18×26cm 非売品
- (4) 佐賀県立博物館 「肥前国産物図考」による習俗 佐賀市内1—15—23 同館刊行 昭和53年 16p. 19
×27cm 非売品
- (5) 佐賀県立博物館 玄海のくじら捕り——西海捕鯨の歴史と民俗展—— 昭和55年 145p. 18×26cm 非売
品
- (6) 多 田 穂 波 明治期山口県捕鯨史の研究——細代捕鯨とその他の鯨とり—— 山口県徳山市マツノ書
店（400部限定）昭和53年 256p. 6,300円 16×27cm
- (7) H. J. スノ ー 千島列島黎明記 馬場 脩, 大久場義昭訳 講談社学術文庫 昭和55年 363p. 780円
H. J. Snow, F. R. G. S., In forbidden sea, London, Edward Arnold, 1910.

(一) 房総の捕鯨⁽¹⁾

著者は朝日新聞千葉支局の記者で、その千葉版に昭和56年9月1日から10月25日まで30回に亘って連載した「房総の捕鯨」をまとめたものである。これは千葉県市川市市川3—3—14郷土史料館、相沢文庫（代表相沢全一氏）が筆者の東京水産大学論集に発表した「房南捕鯨（11号、1976）」と「鯨の墓（12号、1977）」を復刻したときに非売品の参考資料として配布したもので房州のツチクジラ捕鯨についてよく調べてあり参考になる。非売品であるが相沢文庫に頼めば入手できるかも知れない。

(二) 紀南の捕鯨⁽²⁾

紀州の捕鯨については既に多くの本が書かれているが本書は沢山の資料（多くは刊本）から史実が集められている。内容は捕鯨史再考、捕鯨史鄙考、捕鯨史雑考に分れている。

(三) 西海鯨鯢記⁽³⁾

本書は谷村勇氏の所蔵原本を写真版とし上部に納め、その下方に活字版を対応させてある（1—34p.）。有名な「鯨記」と内容がよく似ているからその関係を探ると面白い。

(四) 肥前国産物図考⁽⁴⁾

原著者は唐津藩の木崎攸々軒入道平国で安永2年～天明4年（1773—84）の11年間に亘って書かれ、異本8種、端本10種があるが、佐賀県立博物館にあるのは「富山本」といわれる最も完備したものであるという。全部で8帖より成りその第3帖に鵜飼、諸狐細、生海鼠桁、鮎魚梁、松川浦鯢取の図が、第4帖は全長10m余りあり小川島捕鯨に関するもの、第6帖に江猪漁事、江猪細之図、鯨細の図、鯛細の図を載せている。本書については、日本庶民生活史料集成第10巻（1970、第三書房）に檜垣元吉氏による解題があるが、今回はアト紙を用い写真と解題を付したものである。この外同館報47号1980、51号1981にも捕鯨に関

する記事がある。

(四) 玄海のくじら捕り⁽⁵⁾

標題の民俗展の資料をまとめたもので、先ず鯨の種類と特性(1—5p.)を述べたのち西海捕鯨の歴史と民俗(5—101p.)について2章に分けて詳述し、更に資料篇がある(102—146p.)。アート紙を用い写真も豊富で捕鯨用具、古文書、絵図などが沢山載っている。資料編の中に「肥前産物図考第四小児の弄鯨一件の巻序(102—140p.)」の写真版と活字版があるので大変参考になる。このような資料が市販されていないのは残念なことである。

(五) 明治期山口県捕鯨史の研究⁽⁶⁾

著者は長年国鉄に勤め既に「見島と鯨」(1968, 230p. 非売品)の著もある。退職後も研究を続け今回本書が刊行された。藩政初期の鯨組の概要、明治期の各浦の鯨組と鯨捕り、組主と資本金、鯨組の労働組織、鯨組の北下の5章から成り原資料を用いて延宝年間(1672)から明治40年(1907)頃までの約二百数十年に及ぶ山陰海岸の捕鯨について書いている。終の方に鯨の墓のこともあるがここには先年筆者が鯨の墓(東京水産大学論集12, 1977)を書いたとき手の及ばなかった鯨の供養碑のことがいくつか載っている。

(六) 千島列島鯨記⁽⁷⁾

本書は13章に分れ、これに付録がついている。

我国の漁船に発動機がつけられたのは明治末年になってからで、それまでは遠洋に出漁することはできなかった。遠洋漁業奨励法は明治30年(1897)3月31日法律第45号として発布され、翌年4月1日から実施されたが、それ以前に外国猟船による日本近海のラッコ、オットセイ猟が盛んに行われた(二野瓶徳夫, 明治漁業開拓史 1981 参照)。この間の事情について詳しく述べると長くなるので略することにするが、外国猟船の船長が書いた本書は明治年間の北洋の事情をよく説明している。本書によると我国猟船が北洋に進出した頃にはラッコなどは殆んど獲り尽されていたようである。オットセイも日本側の体制が整った頃には、米加(英)露などの諸国が獲り尽して、4カ国保護条約の出来た頃には数百万頭いたといわれるオットセイが僅か15万頭に激減していた。外国の本には日本船がオットセイを絶滅したように書いているものもあるが、日本船が獲ったオットセイは僅かなものであった。本書は公式の調査報告では知ることのできない実情を知るに役立つ。内容を詳しく述べるときりがないので、ラッコの分布図だけを引用しておく。

ぶ つ く す

- 1) Barthelmess, K., 1982. Das Bild des Wals in fünf Jahrhunderten. dme-Verlag, Germany, 80pp.
- 2) Best, P. B., 1981. The status of right whales (*Eubalaena glacialis*) off South Africa, 1969-1979. Investi. Rep. Sea Fish. Inst. S. Afr., 123: 1-44.
- 3) Bester, M. N., 1981. Distribution, habitat selection and colony types of the Amsterdam Island fur seal *Arctocephalus tropicalis* at Gough Island. J. Zool. 196(1): 217-232.
- 4) Gordon, K. R., 1981. Locomotor behaviour of the walrus (*Odobenus*). J. Zool. 195(3): 349-367.
- 5) Hamanaka, T., T. Ito and S. Mishima, 1982. Age-related Change and Distribution of Cadmium and Zinc Concentrations in the Steller Sea Lion (*Eumetopias jubata*) from the Coast of Hokkaido, Japan. Marine Pollution Bulletin, 13(2): 57-61.
- 6) Kato, H., 1982. An Outline of the Antarctic Minke Whale Assessment Cruise (IWC/IDCR) in 1978/79 to 1980/81. Mem. Nat. Inst. Polar Res. Special Issue 23: 94-107.
- 7) Kato, H., 1982. Some Biological Parameters for the Antarctic Minke Whale. Rep. Int. Whal. Commn., 32: 935-945.
- 8) Lincoln, R. J. and D. E. Hurlley, 1981. A new species of the shale-louse *Syncyamus* (Crustacea: Amphipoda: Cyamidae) ectoparasitic on dolphins from South Africa. Ann. Cape Prov. Mus. (nat. Hist.) 13(13): 187-194.

- 9) Maccann, T. S., 1981. Aggression and sexual activity of male Southern elephant seals, Mirounga leonina. J. Zool. 195(3): 295-310.
- 10) Miyazakik, N., 1982. Catch of the Striped Dolphin off the Pacific Coast of Japan. Mem. Nat. Sci. Mus., 15: 231-237.
- 11) Renouf, D., J. Lawson and L. Gaborko, 1982. Attachment between Harbout Seal (Phoca vitulina) mothers and pups. J. Zool. Lon., 199(part 2): 179-187.
- 12) Stewart, R. E. A., N. Lightfoot and S. Innes, 1981. Parturition in harp seals. J. Mam., 60(4): 845-850.
- 13) Sullivan, R. M., 1981. Aquatic displays and interactions in harbor seals, Phoca vitulina, with comments on mating systems. J. Mam., 60(4): 825-831.
- 14) W. L. Van Utrecht, 1981. Comparison of accumulation patterns in layered dentinal tissue of some odontoceti and corresponding patterns in baleen plates and earplugs of balaenopteridae. Beaufortia, 31(6): 111-122.
- 15) フカガワクジラ発掘調査団, 1982. 深川産クジラ化石発掘調査報告書, 深川市教育委員会, pp. 87.
- 16) 太地町立くじらの博物館, 1982. 和歌山県太地で捕獲されたサカマタの飼育について, pp. 27.